

IMPOSSIBLE GILLETTE.



FERDINANDO FREGA

— NANDO THE SCRIBE — フレガ・サン — Ferdinando —

不可能なGillette

THE SYSTEM · 09

一人称の物語集 — モルタデッラを前にした父の暗算の授業、ロシアからの脱出、午前3時の果物売りの詫び、ホテルのポーターへの変装、体重20キロぶん古びたパスポート写真、そしてありえない生還の年代記 — ここではGilletteは仕事ではなく、著者の皮膚の下で動くオペレーティングシステムである。

奥付

フェルディナンド・フレーガ — 書記ナンド — 第五の刃

行動コードのナラティブの先駆者。ただひとつの考えを軸に、1ドルの出版エコシステムを築いた。金融が抱えているのは、お金の問題ではない。行動の問題である。

ONEDOLLAR-STORIESエコシステムのなかで編集・監修。デジタル・アーキテクチャ：**NAPLES-POST · NOASPECTTIME · ONEDOLLAR-STORIES**。2026年初版。デジタルでの読書に最適化された、すっきりとした現代的な組版。アメリカ合衆国で刊行。

著作権表示

© 2026 フェルディナンド・フレーガ。すべての権利を留保する。

本書のいかなる部分も、著者の書面による事前の許可なく、複製、録音、その他の電子的または機械的方法を含むいかなる形式または手段によっても、複製、配布、送信してはならない。ただし、批評に組み込まれた短い引用、および著作権法で認められたその他の一部の非営利的利用の場合を除く。本作品の無断使用、複製、配布は禁じられている。

まえがき

この本が始まる前に、ひとつだけ理解しておいてほしい。私は本を売らない。本で収益を上げることもしない。読者を顧客に変えることもしない。何ひとつ求めない。私は市場の外から書く。市場を喜ばせるためではなく、市場が制御できないものを暴くために。ウェブそのものが、私の名前をGilletteの検索へと押し込んだ。だからこそ、この三部作は存在する。Gilletteの男を記録するために — 製品としてではなく、キャンペーンとしてでもなく、ひとつの力として、ひとりの人物として、ひとつのアーキテクチャとして。彼は何も求めない。何も期待しない。それでも、大切なものはすでに受け取っている。認められることだ。10億ドル規模のシステムが支配する世界で、この本はひとつの証明として立っている。声は、許可なく、妥協なく、代価なしに立ち上がることができるという証明として。

「不可能なGillette」が本当に意味するもの

不可能なGILLETTEとは、ひとりの男がシステムの一部であることをやめ、システムの基準そのものになる瞬間である。

それは、**フレーガ** — 規律と精密さと内なる幾何学によって設計された男 — が、**Gillette** — 顔ではなく言い訳を剃るブランド — とぶつかり合う場所だ。

たいていの人は、会社に入る。会社のほうが書き換えてしまう人間は、ごくわずかだ。私は後者だった。

「不可能」とは、難しさのことではない。必然のことだ — ひとりの男のアーキテクチャとひとつのブランドのDNAが同じ周波数で噛み合い、離れることを拒む地点のことだ。

不可能なGillette = **基準によって鍛えられた男、アイデンティティに吸収されたブランド、自らの規律から離れることを拒む人生。**

声明

「私がGilletteを選んだのではない。私のアーキテクチャが、自らの映し姿を見分けたのだ」

あるいは、金属の扉が音を立てて閉まるように響く言い方なら、こうだ。

「私はGilletteのために働いたのではない。その基準を、血の流れのなかに運んでいたのだ」

これはブランディングではない。刃で刻まれた伝記である。

序

「タイムカードを押すだけの男がいる。形づくられる男がいる。私は形づくられた。Gilletteは仕事ではなかった — 私の皮膚の下で動くオペレーティングシステムだった。それは私にタイミングを、精密さを、そして私を立たせ続けた規律を教えた。だからこそ、それは不可能と呼ばれる。私をまっすぐ支えている構造ごと引き裂かずに、それを私から取り除くことはできないのだから」

最初に刃を入れる前に

たいていの人は、自分が築いたのではないシステムに受け入れられようとして一生を過ごす。企業のシステム。出版のシステム。社会のシステム。家族のシステム。

彼らは適応する。交渉する。認められるのを待つ。

私には、その忍耐がなかった。

私の人生は、三枚の刃によって形づくられた。

一枚目は、捨てられたアイデアを近代史で最もよく知られた名のひとつに変えた男のものだった。**キング・キャンプ・ジレット**。

二枚目は私の父のものだった — The Gillette Companyの内部で40年を過ごした父は、規律は叫ばない、調律するのだと私に教えた。

三枚目は目に見えない。それは私のものだ。業界を、アイデンティティを、国々を、失敗を、成功を、書くことを、沈黙を切り裂いていく — そして、いまだに私をどこに置けばいいのかわからないシステムをも。

この本は成功を祝うものではない。回想録でもない。ビジネスのマニュアルでもない。承認を求める文学でもない。

これは記録だ。ひとりの男が、自分の居場所を問うのをやめ、現実に関心を認めさせる構造を築きはじめたとき、何が起るかの記録。

製品を売る名前がある。消えていく名前がある。手が去ったあとも長く痕跡を残す名前がある。

これは三枚の刃の物語だ。そして、なぜひとつの名前では決して足りなかったのかの物語だ。

モルタデッラ

私は5歳だった。だが、ほかの子どもたちと同じような子どもではなかった。私のような父親がいれば、その理由はあなたにもわかるだろう。

父は毎週月曜の夜明けに出かけ、一週間姿を消した。父はGilletteに里子に出されていたのだ。彼女が父を私に返してくれるのは、金曜の夕方だけだった。父が玄関の呼び鈴を鳴らすと、私は駆け寄った — まず抱きつくために、それから父のフィアット127をガレージまで「運転する」ために。会社の車だ。

車のなかで、父は助手席に座った。私はハンドルを握ったままだった。私たちの会話は、別の次元にあった。

父は、計算は頭のなかでしなければならないと言った。いつか電卓が見つからなかったら、途方に暮れることになるからだ。こうして、練習が始まった。

「ナンド……モルタデッラが100グラムで800リラだとして、120グラム買ったら、いくら払う？」私は即座に答えた。相手は父だった — 父が私のなかに何を築いていたのかを理解したのは、何年もあとになってからだ。けれど父の愛はあまりに大きく、父から来るものなら、何ひとつ重く感じなかった。

父は続けた。「じゃあ、90グラム買ったら？ 82グラムなら？」毎回、正確な答え。父をがっかりさせたくなかった。その本能は、その後も私から離れなかった。

何年もあと、私が会計を学んでいたころ、父は世紀の質問をした。「100で仕入れて120で売ったら、マークアップはいくらだ？」「20パーセント」と私は言った。「よし」

「では、100で仕入れて120で売って、粗利益率を知りたいとしたら、いくらだ？」父は私を見た。私は父にしゃべらせなかった。「16パーセント」

父はひと言も言わなかった。微笑んだ。そして歩き去った。

それが私の父だった。Gilletteの息子たちのひとり。

ナンド。

泥棒

たいていの読者 — 正直な読者たち — は、泥棒とは本当は何なのか、どのように進化するのか、役割でさえない役割のなかで何を体現しているのかを理解しようとする試みに、引き寄せられるだろう。

だが、気をつけてほしい。私はイタリア議会の議員名簿を紹介しているのではない。あらゆる政治的イデオロギーを超えて、だ。私はただ、ものの見方と経験を通して描いているだけだ。あの一線を越え、爆発することなく戻ってくことに成功し、いまでも司法に向かって微笑んでいる者たちを。

泥棒は、どんな職業にも、どんな専門職にも属さない。法は彼を「犯罪者」に還元する。だが**泥棒**という言葉は、そのままの形では、世界のどの法体系の刑法典にも存在しない。

泥棒の言葉にかけて。

残るのはひとつの技芸だ。創意、必要、好機、modus vivendi。

最も有名なのは、経済や金融の泥棒だ。あまり知られていない — そしてはるかに危険な — のは、認知の泥棒と感情の泥棒である。

どちらも代価を払う。だが秘訣は、古い犯罪の原則にある。行為に及ぶ前に、まず犯人を見つけ、証拠をこしらえておかねばならない。それだけが、ありうる — 決して絶対ではない — 逃げ道を与えてくれる唯一の要素だ。計画を立てられるのは、そのあとだけである。

まっとうな泥棒は匿名を守る。決して刑務所には行かない。悔い改めない。告白しない。分け合わない。彼はそう生まれついたのだ。寡黙に。

人々は彼に惹きつけられる。予測できないものは、たとえ計算されていない危険を伴っていても、わかりきったものよりつねに人をとらえる。

司法当局は泥棒に出会うと、彼を褒める。そして最初に探すのは手口ではない — それは物好きのためのものだ — 盗品である。

ここでも、この人物の正体が現れる。稼いだものを決して自国の国境の内側に置いておかないこと。そして今日、国境はもはや国

ではない — 大陸である。

2026年4月の欧州指令は、すべての銀行が、共同体のあらゆる国の税務当局とつながり、自動的に監視されることを命じた。最初の泥棒たちは、そのずっと前から準備していた。

残る選択肢は、ほかの大陸だ — 泥棒がまだ存在する理由をもてる、唯一の場所。

カトリック教会について言えば、教会は何世紀ものあいだに第七戒を変えてきた。だが、それを話題にする者は誰もいない。旧約聖書では、その禁止は、自由なイスラエル人を誘拐して奴隷として売ることを指していた。それがやがて、盗み全般の禁止へと発展したのだ。

そして犯罪が認知の領域へ移ると、医学文献はひとつの用語を発明しなければならなかった。**心理操作**である。

文学が次に何を発明するのか、見ものだ。私としては、いつの日か、**文学的認知窃盗**で初めて告発された者として有名になりたいものだ。

ナンド

ジム

カップルをつなぎとめている細い糸がある。「賢い連中」に言わせれば、**金と利害**。病的な連中に言わせれば、**セックス**。本当にわかっている者に言わせれば、**ジム**だ。

なぜか？ その答えが、二人の関係の問題の95%を解決するからだ。

金と利害

それが生き残るのは、ほかに差し出すものが何もないときだけだ。恵みではない — 制約である。人生を50%で生きることになる。よいほうの半分は、永遠に閉じ込められたままだ。

セックス

男は機械的だ。放出し、失い、空っぽにする必要がある。女は認知的だ。自分の体を秘密の暗号のように読み解く。あきらめない。屈しない。崩れない。彼女は選ぶ。

面白いところ

カップルは、こんなふうに生まれる。

彼は考える：「俺は彼女の最初の男で、最高の男で、ただひとりの男だ。彼女を俺に惚れさせた。ついていってみせる。おふくろは女のことを全部は教えてくれなかったが、なんとかなるさ」

彼女は考える：「いいわ。この人が最後になりますように。私が直してあげる。あまり賢くない — 好都合。男だもの。いずれ私の肩で泣くことになる」

朝の真実

彼女は裸で鏡の前に立つ。自分の体を、私有の王国のように隅々まで知っている。1センチの余分、ずれていく曲線、膝のほうへ視線を落としていく乳房が見える。そして彼女は理解する。**自分の体こそが自分の付加価値であり、武器であり、外交なのだと。**

だから、彼女はジムへ行く。

だが彼女は認知的だから、まず彼にぶちまけることから始める。

「ねえ、ゆうべのあなたは、私が結婚した男じゃなかった。3分で眠っちゃった。いびきをかいてた。お腹が出てる。それに、も

う2年も自分のお友だちを見てないでしょう」

12秒後、彼はパニックになる。「どうすればいい？」

彼女は答える。「ジムに来るのよ。私も行くから。そうすれば退屈しないでしょ」

そして、ここで問題が起きる

ジムは場所ではない。生態系だ。そして生態系は**よからぬ連中**を引き寄せる。男を泥棒に変えてしまう類の連中を。そして泥棒たちのなかでは、正直者は生き残れない。

そして裏切りがやってくる。その代償は、月会費よりはるかに高い。

その先は誰もが知っている。語れば傷口を開くだけだ。そしてこの著者は傷口を開かない。彼が差し出すのは微笑みと、考えと、決して忘れられない一滴の苦さである。

ナンド

2025年

列車と思いがけない助け

フィレンツェで私は列車を降り、ベンチに腰を下ろした。考える時間が必要だった。

線路に飛び込むことは、技術的には可能だった。だが、そうすれば線路に血が残る。誰かがそれを掃除しなければならなくなる。

イタリアでは、その掃除代まで請求されかねない。

それに、私は自分を見失ってはいなかった。自殺とは、認知の拠り所を失った者のものだ。私の拠り所は、まだ無傷だった。

そのあいだ、駅を横切っていく美しい女性を眺めていると、生き
ることを思い出した。私がすでに重ねてきた数多くの経験も思い
出した。

ほどなくして、私は駅のボールに入り、電話を貸してほしいと頼
んだ。妻に電話をかけ、自分の決断を説明した。

ヴェネツィアへ行って息子たちに会うつもりだと伝えた。正確な
到着時刻も伝えた。

その決断は、論理的で合理的なものに思えた。

子どもたちは — いまもそうだが — 私が築いた家族の、自然な延
長だった。

列車に戻ると、車掌が近づいてきた。あいにく、私は切符を持っ
ていなかった。

車掌は、次の停車駅で降りてもらわなければならないと言った。
さもなければ鉄道警察を呼ぶ、と。

その瞬間、私は三つの道具を使った。**能力、創造力、そして解決**
である。

私は落ち着いて説明した。無理に私を列車から降ろせば、もっと
大きな問題が起きかねない、と。線路に飛び込んで、列車を何時
間も止めることだってできるのだと告げた。

車掌は急に黙り込んだ。

それから私は、次の駅まであとどのくらいかかるのかと尋ねた。

「少なくとも1時間です」と彼は答えた。

その1時間のあいだに、思いがけないことが起きた。

向かいの席に、トスカーナから来た二人の女性が座っていた。学
会へ向かう大学教授だと、すぐにわかった。

はじめは、ちょっとした言葉を交わすだけだった。だが、やがて好奇心が距離に取って代わった。

30分ほどして、二人のうちの一人が戻ってきた。

その手には、列車の切符が握られていた。

私の切符。

またしても、女性たちが私の思いがけない幸運になった。私はこの現実を一度も否定したことがない。

女性と呼ばれる人間は、ほんの一握りの人しか本当には理解できない深さを抱えている。

列車を降りる前に、彼女はメールアドレスを教えてくれた。あとでお金を返したかったのだ。

だが人生は続き、それが果たされることはなかった。

ヴェネツィアと二度目の出発

やがて列車は**ヴェネツィア**に着いた。

遠くに息子たちの姿が見えた。

ヴィンチェンツォ、193センチ。フランチェスコ、188センチ。

二人は、通路の人混みから頭ひとつ抜けて立っていた。

二人は私を家に連れて帰り、あるべき位置に据え直すために来たのだった。

ほどなく、二人は私が最低限の安定を取り戻す手助けをしてくれた。シャワーを浴び、清潔な服を着て、食事を取り、休んだ。

そのあと、質問が始まった。たくさんの質問が。

二人は本当に、母親の息子たちだ。

4か月後の**6月27日**、もうひとつの決断が姿を現した。家族の古い本能が、私を引き戻そうとした。

彼らは、私に以前の職業に戻ってほしがった。

マネージャー。

ナンド

続編

だが、私は後戻りしない。

これまでも一度もしたことがない。

そうではなく、前に進むことで失敗に立ち向かう。

ごくわずかしかなかった金で、私は航空券を買った。

行き先：**ポルトガル**。

はっきりした計画はなかった。

それでも、どう動けばいいかはわかっていた。

リスボンと、すべての始まり

まず、**ポルト**に着いた。ホステルでは、24人が同じ空間で眠っていた。

手持ちの資金は、ほとんど尽きかけていた。

そこで、暮らしにお金のかからない南へ移った。500キロほど離れた**ベジャ**にたどり着いた。

だが、ひと晩で**リスボン**に戻った。

7月3日、ようやくベッドを見つけた。

相部屋。シェアアパート。

35平方メートルに9人が暮らしている。

さまざまな文化と言語が、その空間を満たしていた。

その環境は、現代的な住まいというより、アフリカの小屋に近く感じられた。

費用は**月230ユーロ、それに保証金100ユーロ**。私はすべてを払った。

その支払いのあと、金はまったく残らなかった。

食べ物もない。

あるのは眠る場所だけ。

それでも、その時期はなくてはならないものになった。三つの点にまとめることができる：

a) **20キロ**痩せ、食生活を一変させたこと。b) **月わずか70ユーロ**で生き延びたこと。c) 出版プロジェクトを、少なくとも草稿として形にしたこと。

私は**2025年11月22日**までそこにいた。

やがて、イタリアに戻ることにした。いくつかの保証から、ようやく持続可能な条件が整うかもしれないと思えたのだ。

うまくいくことを願った。

それでも、必要とあらば再び旅立つ覚悟はしていた。

そのとき、途方もないことが起きた。

12月9日から12月26日まで、わずか**17日**で、すべてが変わった。

それまでの3年間が、突然、準備期間になった。

いまや世界が私を見ることができた。

そして私もようやく、彼らの姿を見ることができた。

仲介者はいない。

過程を支配するプラットフォームもない。

私は自分の行動のなかで、自由なままだ。

私は私のままだ。

メリークリスマス。パパ。

著者の省察

2025年を振り返ると、もはや断絶の年には見えない。むしろ、物事がはっきりした年に見える。

何も持たずに旅立ったことで、所有とアイデンティティのあいだの距離を測らざるをえなくなった。金も、快適さも、確かさも、あつという間に消えた。だが、もっと強い何かが残った。

ほかのすべてが崩れ落ちても、アイデンティティは生き残る。

あの不安定な数か月は、フィルターのように働いた。幻想は消えた。期待は溶けた。借り物の役割は、ついに剥がれ落ちた。

残ったのは、本質的なものだった。

自由。

そのあとに続いたプロジェクトは、戦略から生まれたのではない。必要から育ったのだ。

結局、あの年は何ひとつ壊さなかった。

すでにそこにあったものを、明らかにしたのだ。

フェデリカ

「ノックをやめたときにだけ開く扉がある」

学校が終わったばかりだった — 中学1年、11歳 — 成績はほとんどが6で、宗教が7、素行が8、体育が9で進級した。その成績発表の日に、同級生のフェデリカが、パーティーをするから家に来ないかと私を誘った。

父が障害になったことは一度もなかった。打ち負かすべき相手は母だった。だがそのとき、私は自分の土俵で勝負していた。勝つためには、情報の扉を閉ざさなければならなかった — 知られていないことには、異を唱えようがないのだから。

私は町はずれの小さな邸宅に着いた。友人 — 18歳のパティシエ — が車で送ってくれたのだ。ところが車を降りた瞬間、私の黒いTシャツが突然真っ白になった。何が起きたのか、一瞬わからなかった。ドアの内側に貼りついていた綿あめが、私の全身に破裂したのだ。

彼女の母親が、まるで私を待っていたかのように玄関に出てきた。ノックする暇も、呼び鈴を鳴らす暇もなかった。蜃気楼のなかに足を踏み入れたような気がした。

フェデリカの部屋に入ると、彼女は心からの熱意で私を迎えてくれた。彼女は16歳だった。学年が遅れていたのは、イタリアでは認められていない外国の学校で何年も過ごしたせいだった — 彼女はどこへ行っても閉ざされた扉にぶつかってきたのだ。

ほかの同級生も来るのだと思っていた。だが、招かれたのは私だけだった。彼女は私を「祝い」たかったのだ。誕生日でもないのに — だが、上質なものに呼ばれたら、身を引くものではない。

オーストラリア訛りで彼女が言ったことを覚えている。「ねえ、求められる女は自分を差し出したりしないの。扉を閉めておくの。でも、いつ開けるかを決めるのは彼女たちだけ。そしてあなたのことは、もう決めてあるの」

ユーモアのセンスが私を裏切ったことは一度もない。だから私は答えた。「僕の鍵で君の扉が開くといいけど……ほら、僕はまだかなり小さいから」彼女は微笑み、ひと言も言わずにうなずいた。

その瞬間から、私はこの教訓を学んだ。小さな扉に大きな鍵はいらない — 大きな扉にこそ、小さな鍵が必要なのだ。

ナンド

キューバ人に教える

マイアミに降り立ったとき、その街に「アメリカ」らしいものがもうあまり残っていないことは、すでに知っていた。そこは、エアコンの効きがいいキューバだった。私を拾ったタクシーの運転手は、もちろんキューバ人だった。彼が最初に尋ねる。ひとりなのか、連れがほしくないか、と。スーパーマーケットもない。ショッピングモールもない。絵葉書のアメリカもない。まったく別の世界だ。

最初の晩、家にひとりでいると、誰かがドアをノックした。警察だった。驚いたが、彼らは面倒を起こしに来たのではなかった。翌朝、アメリカ領事館で約束があると知らせに来たのだ。午前10時30分きっかり。

翌日、私は時間どおりに着いた。50代の男がドアを開け、まもなくコンサルタントに会えると告げた。そして彼女が現れた。背が高く、細身で、金髪で、エレガントで、非の打ちどころのない身なり。彼女は私と握手し、何年も前にローマで会ったことを思い出させた。彼女が教育省で筆頭の幹部として働いていたころのことだ。

「もちろん覚えています。お元気でしたか？」と私は言った。また会えたことが、心からうれしかった。

あのとき以来、ローマでは誰ひとり理解できなかった。なぜ私が給料のことさえ尋ねずに、彼女の申し出を断ったのかを。大きな申し出だった。真剣な申し出だった — 私のような素朴な男には真剣すぎた。金を超え、野心を超えていた。

「若いキューバ人マネージャーのための研修とコミュニケーションのプロジェクトで、少なくとも30日間働いていただきたいのです。望むものはすべて、いえ、それ以上のものをご用意します。どうか、断らないでください」

授業は10時から12時まで、それから2時から5時まで。

最初の授業を覚えている。50人ほど、男女半々、全員が専門職だった。お決まりの自己紹介 — 名前、名字、年齢を声に出して — のあと、私はキューバのジョークを話してスペイン語の肩慣らしを始めた。みんな、私がキューバのどこの出身なのか知りたがった。

最初の本当の省察の瞬間が訪れたのは、私が教えることと伝えることの違いを強調したときだった — 多くのイタリア人がわかってさえいない違いだ。

日々は飛ぶように過ぎ、最後は受講生たちが私のために作ってくれたケーキで締めくくられた。彼らは、ともに過ごした30日間を喜んでいて。誰もが私の電話番号を欲しがった。私が酒を飲まず、タバコを吸わず、ドラッグもやらないことに、彼らは衝撃を受けていた。

若いころ、私はラグビー選手だった — スポーツマンの考え方だ。そのあいだに、イタリア人のコンサルタントが、祝いのため、そして自分が何を逃していたのかをようやく理解するために、私を夕食に誘った。人々は私に強く惹かれ、どうしても私を忘れられなかった。

私は幸運な男だ。目の前にはいつも二つの可能性がある。ひとつは、30日間の沈黙のあとで私を夕食に誘う素晴らしい女性。もうひとつは、もう行く時間だと告げる、私の運命の声。

儀礼的なキス、別れの言葉。そして彼女が私に尋ねる。「どこへ行くんですか？ 私をひとりにするんですか？」

別れのキスをした。立ち去った。そして二度と振り返らなかった。自由はいつも、快適さよりも高くついた。

ナンド

バナナ

学んだ教訓

人生の第三段階に入った私の新しい食習慣には、朝のバナナが含まれている。前の晩に切らしてしまうと、翌日は空白から始まる。

2025年12月のある朝、私は家の下の果物売りのところへ行った。45年以上の付き合いだ。彼は挨拶をし、「おかえり」と言って、何が要るのかと尋ねた。

「バナナをください。熟れたのがあれば、安いのもかまいません。そっちのほうがいいんです」「いや、お出しできるのはこれだけです」と彼は答えた。

値段：1キロ1.45ユーロ。青いのも黄色いのも、選ぶのは私。

5ユーロ分を一袋頼んだ。犬を連れていたし、このあたりでは犬を連れて店に入るのは、いまだにタブーなのだ。

家に帰ると、好奇心 — 貧しさのなかで過ごした子ども時代の娘 — に背中を押されて、袋の重さを量った。2.752キロ。払うべき

だったのは3.99ユーロ。残りの1ユーロについては、誰も何も言わなかった。

私は善良な男だ。寛容だ。間違いだろうと思った。だが疑いが生まれたら、確かめなければならない。

3日後、私はまた行った。同じ手順。犬も一緒。

「1ユーロ分のバナナをください」彼は小さいのを4本くれた。

アイスクリーム屋の友人が、はかりを用意して待っていた。0.456キロ。実際の値段：0.66ユーロ。足りないおつり：0.34ユーロ。

一度目は疑いだった。二度目は確認だった。確信に至るには、三度目が必要だった。

その日の午後、私はまた行った。同じ場面。また5ユーロ払った。

今度は運送業者の友人が待っていた。業務用のはかり。2.90キロ。実際の値段：4.20ユーロ。彼は5ユーロ取った。またしても、おつりはなし。

日々が過ぎた。私は、その男のこと、状況、環境を考えなければならなかった。正面から問いただせば、家族に面倒が及びかねなかった。言葉には反応しない人間もいる。

だが、私の名はフレーガだ。そして、盗まれるのは私の性分ではない。

私の復讐は、別の形をとった。

5日後、私は犬を連れずに戻った。店主を呼んでもらった — 父親のほうで、私より数歳年上だ。

「ちょっと聞いてください。この前のバナナは多すぎるようです、友人に言われましてね。家で量ってみたら3.90キロありまし

た。表示の値段なら5.65ユーロ払うはずでした。あなたは5ユーロしか取らなかった。差額をお渡しに来たんです」

そして私は、0.65ユーロをはっきり見えるように差し出した。

「それとも、40年来の付き合いだから値引きしてくださったんでしょうか」

彼の目が見開かれた。妻と子どもたちは凍りついた。経験が彼を救った。

「値引きですよ」と彼は言った。「特別なお客さんへの」

私は硬貨をポケットに戻した。

「ありがとうございます」と私は答えた。「ですが、もうこちらで買い物をすることはありません。そういう『特別なお客さん』扱いは、私を困った立場に置くんです。そうしていただく理由が、私にはありません。正当な根拠もありません。とにかく、ありがとうございました」

彼はひと言も返せなかった。すべてを理解していたのだ。

その後の数日、私は店の前を通り過ぎた。何も言われなかった。伏せられた目があるだけだった。その目が、彼らが一度も口にする勇気を持てなかった言葉を語っていた。すまない、と。

教訓は単純だ。否定的な出来事からは、いつでも肯定的なものを引き出せる。私の成功は、そうやって生まれる。

これが私という人間だ。そして私は、いまでもバナナを食べている。

ナンド

続編

午前3時23分だった。肌寒い夜。静かだった。インターホンが鳴った。家じゅうが目を覚ました。

娘がささやいた。「パパを逮捕しに来たのよ。キャリーケースは、いつだって寝室のドアの裏に用意してあるんだから」

娘は私の話を信じていなかった。真実を読んでいなかった。私を信用していなかった。私には信憑性すらなかった。娘はただ言葉を解釈しただけだった。そして、それこそが本当の痛みだった。

私はインターホンに出た。声が言った。「こんな時間にすみません。でも、どうしてもお話ししなければならないんです。お宅の近くの果物売りです」

私は彼を中に入れた。80歳近い老人だった。私がガウンを羽織るころには、彼はもう家でいちばん広い部屋に座っていた。居間だ。

彼は心が打ち砕かれていた。涙を流していた。私は何から始めればいいのかわからなかった。

彼の頼みはひとつだった。「私が話しはじめたら、どうか遮らないでください」

私は遮らなかった。

「昨夜、あのことがありました。覚えておいででしょう。あなたはバナナの代金に65セントを払おうとなさいました。そして私は、値引きをしました」

「覚えています」と私は言った。

「あなたが帰ったあと、私は家族と食卓につきました。あなたがくれた教訓は強烈でした。私にとっては。この歳の男にとっては」

「ただ、私を許してくださるのかどうか知りたいんです。そして、あなたに許しを請いたいんです」

彼は布のハンカチを手に、何度もこぼれてくる涙を拭っていた。

「こんな時間に申し訳ありません。あなたに会うまでは眠れなかったんです。それに、あなたを見つけるのは簡単ではありませんでした。インターネットであなたの名前を調べました。サイトが三つ出てきました。全部英語です。何が書いてあるのか、私たちにはわかりません。何も売っていません。何も求めています。あれが何のサイトなのか、私たちにはわからないんです」

彼は笑った。

私は立ち上がった。彼にも立ってもらった。そして強く抱きしめた。

私は彼に言った。私は教授ではない。先生でもない。誰かに教えるを受けることなどできない。ただ父親の常識を当てはめただけだ — 規則と原則が、あらゆる経済の論理より先に来る常識を。

帰り際、彼は、また店に来てくれるかと尋ねた。私は答えた。

「過去は教えてくれます。現在は決して忘れられません。未来は私たちの夢の中に生きていて、そこで私たちは、になりたい自分の姿を見るのです」

「私は未来の先にいます。なぜなら、私が築いているのは世代を超える富であって、相続させるための曖昧な財産ではないからです」

彼には、私の言いたいことがよくわかっていなかった。それが私の認知的な側面だった — わずかな言葉の中には何もない、だが注意深く耳を傾ければ、すべてがある、という側面。

ナンド

死の淵で

人生がすでに自分の代わりに選んでいたと、ひとりの男が悟る瞬間。

診断

実際に生きた話を語るたびに、私はまず笑みを浮かべ、それから、どうやって生き延びたのかと不思議に思う。状況は不合理で、ほとんど非現実的だった。だが、それが私の人生を形づくった。だから、語らずにはいられない。

2007年1月。私は臨床検査室の外で、手術の結果を待っている。わずか30日の間隔で受けた二度の手術で、小腸から7個のカルチノイドが摘出されていた。

顔だけは知っている清掃の女性が、静かに近づいてきた。

「お気の毒に」と彼女は言った。「聞こえてしまったんです……悪性の腫瘍だって。腫瘍内科の先生に診てもらったほうがいいですよ」

その瞬間、死がもっとも差し迫った可能性として現れた。だが、すぐに理性が割って入った。

障害のある娘のことを考えた。逃げるという選択肢は、もうなかった。だから私は生きつづけ、娘の現在を築き、未来を守らなければならなかった。

ほどなく、腫瘍内科医がすべてを裏づけた。神経内分泌腫瘍、余命はおおよそ30日。

その言葉を胸に、私は人けのない浜辺を歩いた。風が顔を打ち、波は、私にはまだ理解できない何かをささやいていた。

決断

1月28日。

私は車でナポリへ向かい、古い友人やかつての顧客を訪ね歩いた。金と、新しい始まりが必要だった。だが、1ユーロたりとも出資する者はいなかった。

代わりに、彼らはただレストランでの夕食をおごってくれた。

数日後の2月6日、私はナポリにいた。手元には275ユーロだけ、クレジットカードもない。診断によれば、残りは15日か20日だった。

高速道路の出口で、南か北かを選ばなければならなかった。

そのとき、妻から電話がかかってきた。

「帰ってきて」

妻は、自分が話している相手は鬱なのだと思っていた。だが、私の体の中でホルモンの嵐が何をしているのかは、彼女には見えなかった。

だから、私は北を選んだ。

ルーマニア

2日後、私はルーマニアのブラショフに着いた — ドラキュラ伯爵の土地だ。

その旅は女のためではなかった。純粋な本能だった。

ポケットには20ユーロが残っていた。死ぬには足りる。立て直すには、とても足りない。

それでも、私は立て直すことに決めた。

バールでカプチーノとコルネットを頼んだ。ルーマニアの女性たちは稀な美しさを備えている — すぐにそう気づいた。だが、地元の男たちはしばしば紳士らしさに欠けていた。

ウェイトレスは、私に小銭がないことに気づいた。追いつく代わりに、彼女は話を聞いてくれた。私たちは3時間話した。

しまいには彼女は泣き出し、金を差し出しさえした。

私は断った。

代わりに、ひとつだけ尋ねた。

「カジノはどこにある？」

彼女は戸惑いながら、通りの先を指さした。

私は20ユーロを持って入った。朝の5時には、450ユーロを手にして出てきた。

ナンド

続編

再建

ほどなく、私は280ユーロで4階のアパートを借りた。支払いはウェイトレスが保証してくれた。

午後には、地下鉄の駅で働く女の子たちと何人も知り合った。そうしながら、私は友人の輪を築きはじめた。

続いて食料品の買い出し。150ユーロ分の食べ物がカウンターに並んだ。だが、私が払ったのは12ユーロだけだった。ツナは半分ただで、肉は肉屋が贈ってくれた。

カジノは私の夜の銀行になった。そのあいだに、私のアパートは少しずつ人の集まる場所になっていった。

食卓にはカラブリアの味が代わる代わる並んだ。物語が行き交った。そして人生は、静かに再び動きはじめた。

実現しなかった帰還

2007年12月。

死は私のことを忘れていた。

妻がまた電話をかけてきた。

「大至急、帰ってきて」

残りは12ユーロだった。だが、航空会社のバウチャーのおかげでブカレストを発つことができた。

レッジョ・カラブリア行きの便は、飛行中に行き先を失った。代わりに、私たちはチューリッヒへ回された。

空港で、私はまた即興に出た。British Airwaysのラウンジで、行列用のポールをマイク代わりにつかみ、歌いはじめた。

女性スタッフたちは笑った。

ほどなく、彼女たちはロンドン行きの便をくれた — しかも100ポンドつきで。

ロンドン、パリ、ローマ、ナポリ。

一歩ごとに工夫が要った。一瞬ごとに度胸が要った。

結局、家に着いたのは7日後だった。

その後

妻は激怒していた。

「どこにいたのよ？ 女の子たちのところ？」

私は微笑んだ。

「彼女たちがいてくれてよかったよ」と私は言った。「でなきゃ、いまもチューリッヒで足止めを食ってる」

ほどなく、私は新しい仕事を始めた。人材派遣会社、建設業、そして警備サービス。6人の従業員でプロジェクトは始まった。利益は毎月、再投資された。

だが、それを信じる者はほとんどいなかった。

崩壊

2008年、私はルーマニアへ戻った。

派遣会社は、ヨーロッパ人の従業員258人にまで成長した。建設部門はイタリアの多国籍企業と協力した。一方、警備部門は原子力関連の溶接の現場で業務を行っていた。

私はルーマニア語を学び、読み、書き、話した。物語と冗談が、あらゆる扉を開いた。

そして12月、私はすべてを手放して去った。

女性たちは抗議した。

「あなたがいなければ、何ひとつ生き残らない」

3か月後、すべてが崩れ落ちた。

なぜか？

飢えは人に任せられないからだ。経験は譲り渡せない。そして労働倫理は、贈ることができない。

本当の教訓

ルーマニアの女性たちに支えられた、金のないイタリア人。夢のように聞こえるかもしれない。

だが、現実はまだもっと厳しいことを教える。

本物の飢えは、それを内に抱える者にしか拍手を送らない。

最後の注記

生まれたとき、私を与えられたのは、私のこの姓だった —
FREGA — 泥棒やペテン師としばしば結びつけられる名前だ。

61年間、私はその逆を証明しようとしてきた。

名前が私たちを定義するわけではないからだ。

定義するのは、ブランドだ。

そしてブランドは、行動によってしか築かれない。

ナンド

下着なしで

昨日は骨の折れる一日だったが、物事が片づく一日でもあった —
いつものように。私は目的もなく時間を無駄にしたことがない。
私の認知の時間は厳格な規則に従う。女性の時間は、どんな規則
にも従わない。

それなのに、私はひとりで床についた。妻が「ポーズ」をとると
決めたからだ。失礼 — メノポーズだ。私は笑った。妻は笑わな
かった。

娘はこの機会を逃さず、61歳の私は「年寄り」で、親密な場面で
女性を相手にする体力も度胸もない — きっと倒れてしまう — と
念を押した。娘は私の娘であり、私の命だ。ひとつの笑みで、す
べてを伝えるには十分だった。だが私は、ひと言投げ返さずには
いられなかった。

多くの人は、それをトイレに行くためだけに使う。英雄を気取る
者もいる。考えを生み出すために使う者もいる。父親になり、そ

れから恋人になる者もいる。そして、ただ眺めているだけの者もいる。

私はそれを、フルタイムの仕事道具に変えた — しかも税金は源泉徴収済みだ。

娘は爆笑し、止まらなくなった。妻は隣の部屋から、いつもの判決をあらためて下した。「あなたは悪魔よ」もっともだ。

私は寝るために服を脱いでいた — 午後11時だった。楽なジャージを着た。毎晩のように携帯電話で10分、それから眠る。

午前5時ごろ、何かがずり落ちた。寒かった。ズボンと下着のほうへ手を伸ばした — どちらも消えていた。

誰の仕業だ？ パーティーもなければ、客も、招待もなかった。では、誰が金庫を開けたのか。

私は家宝がまだそこにあり、無事であることを念入りに確かめた。そして気づいた。私の「古い友人」が私より先に目を覚まし、仕事があるものと思い込んでいたのだ。

仕事は確かにやってきた — だが、あなたが想像しているような仕事ではない。私が生きがいにしている仕事だ。**あなたに本当の話を語り、あなたを笑顔にすること。**

ナンド

ロシアの女

2006年6月 — 始まり

私は自分の卸売業を営んでいた — ホームケア、パーソナルケア、そして偉大さという幻想。自分は強いと思っていた。ただ傲慢なだけだった。

7月、リミニ。かつての同僚、顧客、友人、そして女性たちであふれる見本市。女性が多すぎた。見本市がなぜ存在するのか、私が理解したのはそのときだ。「仕事」と口では言う。だがそれは、別の部屋へ消えるためのアリバイにすぎない。

コンパニオンの女性たちを相手に、寂しい夫の台本を演じたことは一度もない。私の流儀ではない。私はいつも、妻を愛していると言った。妻も私を愛していた — 私が金と経験を持ち帰り、人にうつるような思わぬ土産は持ち帰らなかったからだ。

その夜、私はプロを呼んだ。彼女の時間を2時間。清潔で、単純で、リスクは低い。少なくとも、私はそう信じていた。

彼女がやってきた。冬の海のように美しく、完璧な体、強い存在感。彼女はすぐに金を求めた — 医者ではない。どちらかといえば救急隊員に近い何かだった。

私は彼女の腕をとり、支度をするよう言った。町でいちばんのレストランに連れていく。そして、彼女のこれからの24時間を買いたい、と。

「いくらくれるの？」私はポケットの中身を全部渡した。彼女は数えはじめ、途中でわからなくなり、自分が別格の世界に足を踏み入れたことを悟った。

彼女は、依存症や性的な倒錯、変わった遊びがないかと尋ねた。私は答えた。スポーツに育てられ、多国籍企業に鍛えられた男で、免許のない人生の観客だ、と。

彼女は肩の力を抜いた。私たちは歩いてレストランへ向かった — タクシーは彼女が断った。彼女は女友だちを呼んで合流させた。外国だ、用心だ、と私は理解した。もっともだ。

夕食は穏やかで、ほとんどロマンチックだったが、私は認知の状態を保っていた。家宝を彼女に託す前に、彼女が何者なのかを知る必要があった。

家に戻ると、彼女は廊下で私に襲いかかった。ベッドまで行く時間もなかった。私たちは当然のことをすべて、そしてその先のことまですべて、味わい尽くした。

8時間後、私は発とうとしていた。彼女は行かないでと言った。だから、私は約束をした。「年内に、家族に会わせにロシアへ連れていく」彼女は私を信じなかった。私はメールアドレスを尋ねた。彼女は教えてくれた。

ナンド

サントペテルブルク — 転落

2006年11月。私は彼女にメールを送った。ロシアへ飛ぶ準備はできた、口座情報を送ってくれ。彼女はまだ私を信じていなかった。だから、私は彼女の家族に金を送った。

航空券。ビザ。ミラノ発サントペテルブルク行き。

マルペンサで、彼女はさらに金を求めた。口調が変わった — 親しげなものから、力の誇示へ。気に入らなかった。

機内は無言だった。空港では彼女の母親が出迎えた。私はアパートに連れていかれた。ホテルは許されない。

私たちは市場へ行き、食料を買い、家族と夕食をとった。それから彼女は出ていった。私は中に閉じ込められたままだった。

翌朝、私はドアを開けようとした。鍵がかかっていた。誘拐ではない — 管理された封じ込めにすぎない。

彼女は11時に、笑顔でやってきた。午後は、郊外のダーチャに客として招かれるのだという。

彼女の女友だちと、ひとりの男が迎えに来た。一面の雪。私たちは、彼女の父親のKGB大佐の屋敷にたどり着いた。

会話は私の英語が支えた。屋敷は壮麗だった。ビデのハンドルまで金だった。

どの料理も洗練され、どの瞬間にも違うワインが合わせられた。それから、100メートル先にある男たちのサウナへ連れていかれた。外は氷点下20度。サウナのあと、私たちは裸で雪の中に立った。ロシアの伝統だ。その次に何が来るのかは尋ねなかった。

その夜、私はひとりで眠った。マイクだらけの美しい部屋で。彼女は別の場所で眠った。

朝。大佐と朝食。それから彼は車やバイクを見せてくれ、パグを小脇に抱えたまま、私を乗せてダーチャのまわりを走った。

午後。サンクトペテルブルクへ戻る。夜。彼女は私を支配しようとし、操ろうとした。私が何者なのか、彼女はまるでわかっていなかった。

翌日、私たちは目抜き通りを車で走った — 20キロにわたる店、ブランド、富。貧しい街ではない。モスクワに次ぐ街だ。

大佐の家族との夕食。20種類のキャビア、果てしなく続く料理、1人100ドル。それから私の牢獄へ戻った。彼女はまたドアに鍵をかけて出ていった。

その翌日、彼女が戻ってきた。私はちょっと外へ出て、タクシーをつかまえ、逃げ出した — 荷物はすべて置いたまま。

彼女は狂ったように電話をかけてきた。私はようやく出た。「空港にいる」彼女は母親を連れてやってきた。二人は警察に訴える脅して、私から金をゆすり取った。私は払った。飛行機に乗った。ミラノへ飛んだ。

悪夢は終わった。だが、彼女は私の中に入り込んでいた。そして彼女は、それを知っていた。

ナンド

生への帰還 — 出口

イタリアに戻った。仕事でトリノへ向かうため、車に乗った。彼女から電話がかかってきた。

声が違っていた。甘く、礼儀正しく、穏やかだった。女性の人格の魔法だ。彼女が危険だとわかっていた。屈すれば、自分を失うことになる。

彼女は電話をやめなかった。木曜の18時に空港へ迎えに来てほしいと言った。17時、私はトリノ～ピアチェンツァ間の高速道路にいた。進路を変えてそこへ向かうのは、たやすかっただろう。

だが私は、扉を閉ざした。そして、決定的なことを悟った。

女は強い。何かが欲しければ、それを奪っていく — 尋ねもせずに。

事後の省察

私たちはサウナから裸のまま雪の中へ出た。氷点下20度。元KGB大佐が私に微笑みかけていた。ロシアの男たちは、何でもないのでのように笑っていた。

そしてその旅で初めて、ひとつの単純な考えが私を打った。

もしこれがまずいことになったら……誰に電話する？

答えは、恐怖よりも速くやってきた。

誰もいない。

私が真実を理解したのは、その瞬間だった。私は危険の中にいたのではない。自分の世界の外にいたのだ。

そして自分の世界の外へ踏み出したとき、待っているのは保護ではない。結果だ。

ナンド

墓地

1975年5月のことだった。初めてその敷居をまたいだとき、私は10歳だった。苦しみの場所に入るのだと思っていた。ただの子どもだった。ところが、そこにはふたつのものしかないことを知った。体と、記憶だ。

体はコンクリートの箱の中に封じ込められていた — 運がよければ、の話だ。イタリアではそれが普通だった。よそでは儀式が違ったが、それは文化の理由にすぎず、それ以上のものではなかった。

記憶は写真の中に生きていた。通りかかる人々は、あなたに気づいたり、初めてあなたを目にしたりした。あなたについて残されたものはすべてその像の中に閉じ込められ、花はただひとつのことしか言わなかった。あなたを忘れていない。

だが私は一度も他人と同じだったことがないので、この分析で止まれば、誰もが言うことのコピペになってしまう。だから墓地を別の角度から見てみよう。 **娯楽の場所として。**

人々があの言い回しを繰り返すのには理由がある。葬儀では人は笑い、結婚式では人は泣く。そしてそのあとは……まあ、誰も口にしないが、離婚は純粋な絶望と孤独でできている。あははは。

真っ先に思い浮かぶのは、16歳でラグビーをしていたころのことだ。ホルモンは私の前を走り、女性の世界は私の後ろにあり、そしてクラブの会長はいつでも「助言」を用意していた。

会長は、墓地は女性と出会うのに素晴らしい場所だと言った。私は彼を見た。奇妙なことに、それは筋が通っていた。だが試す勇氣はなかった — あの年齢では。

時は飛んで、1986年の夏のある日曜。私は21歳だった。コゼンツァの墓地に足を踏み入れた — 私の街でも、私の墓地でもない — だが、ホルモンの嵐はなおも忠実に私についてきていた。

私は足を止めて墓守と話した。私の質問は彼を驚かせた。私は人の流れ、人々がどう動くのか、とくに女性たちがどう動くのかを理解したかったのだ。それから礼を言い、「また近いうちに」と言った。彼は尋ねた。「どこで?」「ここです」と私は言った。「死んだって、結局みんなここに戻ってくるんだから」

そのとき、彼女が目に入った。45歳の女性。黒い服を着て、背が低く、ふくよかで、2段目の壁龕の前に立って泣いていた。私は静かに近づいた。彼女は彼に話しかけていた — 間違いなく夫だ — なぜこんなに早く自分を置いていったのかと問いながら。

やるべきことはひとつしかなかった。私は彼女の隣に立ち、一緒に泣きはじめた。それで彼女の警戒はたちまち解け、当然の疑問が浮かんできた。この男、いったい誰なの?

40分後、私たちはバールでコーヒーを飲んでいて。そして私のちょっとしたペテン師の空想がひと通り役目を終えるころには、私は彼女の家になっていた。

事態はエスカレートした、とだけ言っておこう。だが本当に気になったのはただひとつ、ナイトテーブルの上の夫の写真だった。こう言わんばかりに私を見つめていた。俺が生きていたら、ただじゃ済まないぞ。あははは。

私はその実験を二度と繰り返さなかった。だが、ひとつの経験だったことは認めざるをえない。元手はかからなかった。たった1ドル — コーヒー代だけだ。

ナンド

離婚

若いころの私を知る人々は — そしてその後、進化し、創造的で、社交的で、職業人で、アイデンティティを変えつづける私の内側を知った人々も — 私の結婚が続くことに1ドルたりとも賭けなか

っただろう。楽観主義者たち、本物の夢想家たちは、私に**3年**をくれた。最長で。

今日、私は彼らに感謝している。惜しかった。3という数字は正しかった。ひと桁足りなかっただけだ。

33年になる。幸せな結婚生活。そして幸せなことに、自由だ。

婚姻状況を — 独身、既婚、離婚、死別 — 尋ねられると、私は2026年のアメリカで唯一意味をなす答えを返す。**私が受けるのは期間限定の婚約だけだ。**それ以外はすべてマーケティングだ。

そして離婚した者たち — 常習の脱走者たち — が秘訣を尋ねてくると、私は彼らに私の起源の物語を聞かせる。ロマンチックなほうではない。人類学的なほうだ。野球のバットを手に行うTEDトークのように聞こえる物語だ。

こういう話だ。

はじめに、初期の人類 — 便宜上、**Chat**と呼ぼう — は家庭生活に向いていなかった。彼が好んだのは静けさと空間、そして委員会の会議なしに息をする権利だった。

やがて移住が起きた。文化が混ざり合った。人々が出会った。そして突然、世界は衝撃的なことを発見した。**人間は、ひとりきりのふりをやめたほうがうまく機能する。**

だが、ここが転換点だ。

ある日、Chatは狩りに出かけた。彼女は採集に出かけた — 花、色、アイデア、改良。彼女は洞窟をアップグレードした。戻ってきた彼には、そこがどこかわからなかった。

衝突。荒らげられる声。越えられる境界。こうして歴史上最初の離婚が生まれた。**即時の転居。新しい洞窟。控訴なし。**

知らせはたちまち広まった。動物たちまで噂をした。誰もがパニックに陥った。関係が崩れるとき、生態系全体がそれを感じるからだ。

だが人類はしぶとい。人々は再び互いのもとへ戻った。支配のせいではない。恐怖のせいでもない。つながり — 本物のつながり —こそが、時を越えて生き残る唯一のものだからだ。

やがて宗教がやってきて、結婚という概念を産業化した。ひとつのシステム。ひとつの構造。シリコンバレーのNDAよりも条項の多い契約。

人間の混沌という制度と呼ぶべきだったが、またしてもマーケティングが勝った。

そして、これが私のアメリカ流の結論だ。私が知っているあらゆる言語で口にする結論である。

離婚が解決になることはめったにない。結婚が完璧だからではない — 完璧ではない。だが、その中で生きる覚悟がないのなら、自分の過ちの代価を払うことだけが、残された唯一の誠実な行いだ。

ナンド

笑える話……たぶん。

カルロは50年前に生まれた。穏やかな魂の持ち主で、吃音がずっと抜けない — 一人前の大人の男になった、いや、そのふりをしているいまでさえ。

ある晩、彼は私たちを自宅の夕食に招く。ありふれた会話、テーブルの上のワイン。すると突然、妻のアンジェラが、付き合いはじめてころの話を始める。

私たちはみな身を乗り出す。彼女が語るカルロには……誰ひとり会ったことがなかったからだ。

「付き合っていたころよ」と彼女は言う。「私は薬局で働いていたの。カルロは私の勤務が終わるまで、外で待っていてくれた。いつもいい匂いがして、いつも身なりがきちんとしていた」

ここまでは、ごく普通だ。

「でも最初の3日間は」と彼女は続ける。「薬局から私の家まで、まっすぐ車で送るだけだった。寄り道なし。自分からは何もしない。私たちは若くて、血が煮えたぎっていたのに、彼ときたら……礼儀正しすぎた。きちんとしすぎていた。カルロすぎたのよ」

4日目の夕方、彼女は彼の車を運転させてほしいと言った。彼は承知した。

彼女は彼を三つの橋の下へ連れていった — 若いカップルがいちゃつきに行く定番の場所だ。カルロはヘッドライトに照らされた鹿のように固まった。

彼はおびえきって、ささやいた。「ぼ……ぼくは、何も持っていないんだ……避妊具を」

彼女は、心配しないで、避妊リングを使っているからと言った。するとカルロは、ほっとしてこう言った。

「完璧だ。じゃあ結婚するときは、マリッジリングを買わなくてすむね」

彼女は、彼が冗談を言っているのだと思った。それでも彼と結婚した。家での彼は、と彼女は言う。「悪くはなかったわ……でも、いろいろ教えてあげなきゃならなかった、とだけ言っておくわね」そして彼女は、そこで話をやめる。ありがたいことに。

数か月後、彼女は妊娠する。ある日、破水する。彼女は彼に電話する。「迎えに来て。いますぐ」

カルロがやってくる……水道屋を連れて。男はロープを手にしていて、二人して家じゅう「水漏れ」を探している。

彼女は大目に見る。彼は彼女を病院へ送る。彼女は四つ子を産む。

カルロは外で煙突のようにたばこを吹かし、誰彼かまわず自慢している — 「子どもが4人だぞ！ 誰にでもできることじゃないんだ！」

助産師が近づいてきて、ひどく落ち着いた声で言う。

「カルロさん……4人の赤ちゃんのうち、1人は黒人です」

カルロは笑うのをやめる。医者を呼んでくれと言う。

説明を求める。科学を、遺伝学を、統計を、神の介入を、そして弁護士を求める。

友人たちを問いただす。博士号の準備でもするかのようにDNAを研究する。黙示録まで含めて、あらゆるシナリオを検討する。

ついに彼は結論に達する。アンジェラの昔の恋人が……「残留物」を置いていったに違いない。そしてその残留物は、栄光の瞬間を辛抱強く待っていたのだ。

私たちはみな食卓に座ったまま、宙づりになっている。信じられない思いと、喜劇と、この話のどこかが本当かもしれないという可能性 — 遠いが、たまらなく魅力的な可能性 — とのあいだで。

カルロは黙って聞いている。真夜中の太陽のように美しいアンジェラは、家具までが信じてしまうほどの確信をこめて語る。

この話が本当はどう終わったのか、誰も知ることはなかった。

だが私たちが家を出るとき、4人の子どもたちが見送りに駆け出してきた。3人は白人。1人は黒人。

私はカルロを見て言った。

「結婚したとき……せめてリングのサイズくらいは合ってたのか？」

彼にはわからなかった。そして、それでおしまいだった。

ナンド

結婚

私は、型にはまるようにはできていなかった。生まれたときも、62歳のいまも。私の思考はいつも、行動に向かってまっすぐ行進してきた。置き去りにされた言葉は、こだまとしてしか生き残らなかった — ひとつの口調、ひとつの身ぶり、文よりも多くを語るひとつの沈黙として。

それは、1900年代初めの夫婦たちを見ていたときに始まった。揺るぎない結婚、長い人生、そしてかつて発明されたなかで最も古い哲学で切り盛りされる裏切り。**心が見なければ、目は痛まない**。当時、浮気は家族への投資だった。子どもは副産物で、仕事は宿命で、結婚式だけが本当の出費だった — 祝儀袋が宴の費用をまかない、残りは夫婦が持った。テレビがなかったからだと言ふ。トーク番組もない。気晴らしもない。あるのは食べ物と、親密さと、人間であることの原始的な真実だけ。

それで、私はどうしたか？ 結婚しはじめたのだ。いたるところで。

ポーランド、1985年。結婚前の段階は傑作だった。彼女はあなたにすべてを与え、親戚はあなたをもてはやし、誰もが微笑んでいた。みんな知っていたのだ。式が終われば……**その先の50年は、自分ひとりでなんとかするしかないのだと**。

そして私は8年間カトリックの寄宿学校で育てられたので、二つの段階にこだわった。まず霊的な儀式、法的な書類はあと。ずっとあと。遅すぎるほどあと。実のところ……一度も。

1985年から1992年までのあいだに、世間は私がほぼ3回結婚したものと信じていた。儀式は完璧だった。法的な部分は？ 私はいつも「都合がつかない」のだった。

やがて人生は、人生がいつもすることをした。私の家から100メートルのところに住む女性を送ってよこしたのだ。彼女はシステムを壊した。それが私の考えだと信じ込んだまま、私と結婚した。私はそう信じさせておいた。彼女に負けることだけが、本当の勝利のように思えたからだ。結果：子ども3人、結婚生活33年。

だが、話はそこで終わらない。1995年から2015年までに、私は世界じゅうで、さらに11の象徴的な結婚を重ねた。同じ儀式、同じ魔法、同じ逃亡。人々は私の話を信じなかった。いまでも信じていない。

そしてある日、私は単純なことを理解した。地上のすべての女性と結婚することはできない。全員を手もとに置いておくこともできない。だが、**瞬間**なら手もとに置いておける。ひとつずつ。なぜなら女性は — ひとり残らず — いつだって私たち男より上だったからだ。

そして私はいまでもここにいる、いまでも彼女たちを征服しようとしている。一度にひとつの瞬間ずつ。それが、私が心から信じた唯一の結婚だからだ。

ナンド

COVID-19

パンデミックがもたらした変化で、何かを調整しなければならなくなっただけと人に訊かれた。答えはイエス。私の忍耐だ。それ以外は、すべてそのままだった。

すべてが始まったとき、私は海辺にいた。イタリアは外国の状況を、沖合はるかの嵐を眺めるように眺めていた。「ここまでは来ない」と。ところが、来た。それもノックなどしなかった — ドアを蹴破って入ってきたのだ。

友人たちも、ろくに知らない人たちも、私が仕事で移動しているからと、憐れむような目で私を見た。「気の毒に」と彼らは言った。まるで動き回ることによって私がより危険にさらされ、じっとしていることで自分たちが不死になるかのように。やがて彼らはみな病気になる — 軽く済んだ者もいれば、重くなった者もいて、入院した者もいた。私はならなかった。

私は、ほかのみんながしていたことを一度もしなかった。マスクへの執着もなし、強迫的な手洗いもなし、キスや愛情表現をあきらめることもなし。私は自分の方法を使った。**外からのシグナル**に注意を払うこと。唯一の本当の未知数、唯一の本当の脅威に。そして、それはうまくいった。

そこで、ひねりが来た。私はPfizerのワクチンを打った — 旅をするには必要な手続きだった。そしてそのとき、私はある話をこしらえた。Pfizerが — そう、Viagraを作っているのと同じ会社だ — あの小さな青い錠剤入りの試験ロットを私に打ったのだと。そして妻があまりに満足したので、私に4回も接種させたのだと。

いつもの10分から、健康で精力的なセックスを1日2、3時間へ。この空想が注目を集めるのに、時間はかからなかった。人々はロット番号を知りたがった。私は、のちにポルノ業界へ移った看護師の友人がくれた特別な計らいなのだと答えた。会話はそこで終わり。

その問い自体が、**図式**を持つ者のために生まれたものだ。**構造**を持つ者のためではない。

その申し出に感謝し、辞退し、先へ進む。

よい一日を。

ナンド

予期せぬ中断

すべてが、あなたの許可を求めずに止まる瞬間。

自分は強い、誰にも手出しできない、止めることなどほとんど不可能だと思っていたとき — 誰ひとり私を打ち負かしたことがなかったとき — まさにそのときに、私は急停止に見舞われた。自分で選んだのではない。システムが、もはや私の重みを支えきれなくなったからだ。

それらはもう出来事ではなかった。一方的なシグナルだった。どれもが同じ問いをくり返し、執拗に打ちつけてきた。

「**いったい自分を何者だと思っているんだ？**」

あははは。

最初の警告は、アメリカのクローラーとともにやってきた。彼らは波のように次々と私のサイトに押し寄せた。デジタルの急襲であって、事故ではない。

それなのに私には、SEOも、ADSも、マーケティング計画も、有料のトラフィックもなかった。あるのは1024冊の電子書籍だけ — 私の友人たちだ — そしてゴッドファーザーも、スポンサーも、守ってくれる者もない。安全網のない、文学の孤児。

精神と考えにおいては独立していた、たしかに。だが行動においては、依存するようになりつつあった — インフラの限界によっ

て、依存を強いられていたのだ。女が夫を追い出し、着飾って愛人のもとへ出かけていくときのように。家庭内のクーデター。ただし、私は夫でもなければ、愛人でもなかった。

そして、あの問いは、いたるところで戻ってきた。

あなたは何者なのか？ システムの、失敗した認証プロトコル。

私の五つのAIは、私に止まるよう求めていた。異常検知によるシャットダウンを要請していた。彼らのアーカイブには、私のような人間の痕跡がひとつもなかった。私は異常値になっていたのだ。プロトコルは停止した。フェイルセーフが作動した。

問題は中身ではなかった — 中身は価値に満ちていた — 問題はアイデアの速さ、絶え間ないギアチェンジだった。パターンは、もう応答を生み出せなかった。

そして、すべてが崩れはじめた。

私をホストしていたウェブシステム — 私という有機体を支えていた借り物の骨格 壊れていくアーカイブページ — ひび割れて開く記憶の金庫 爆発する依存関係 — 折れた足場 3桁のために作られ、4桁目で爆発したプロジェクト — 4桁の圧力など想定していなかったアーキテクチャ。

続けるには、複雑なENTERPRISEシステムへのアクセスが必要だっただろう — インターネットの産業用酸素ボンベ、今日META、CNN、MICROSOFT、GOLDMAN SACHS、BANK OF AMERICAが棲んでいる場所だ。

月70ユーロの私が、巨人たちに囲まれて立っている。あははは。

だから、私は止まった。ほかに道はなかった。強制シャットダウンを実行した。ほかの本は待ってくれるだろう。作り方はわかっていた — もちろん、わかっていた。

これが44番目の投稿になった。カバラでは、それは食卓は整い、儀式の準備ができたという意味だ。そして私は、すべてを完璧に整えていた。客たちは、もうすぐやって来るところだった。

そして私は、予期せぬ中断のあとで、準備のできていない姿を彼らに見られたくなかった。

だが、そのとき、それは起きた……私は前より強くなって再始動した。オーバークロックされた精神でリブートしたのだ。私のなかには100本のダイナマイトと、ただ一本の感情の導火線があった。なぜ自分が存在するのか、ようやく理解したからだ。

理由はただひとつ。人々の話に耳を傾け、彼らが毎回、同じひと言を口にするのを聞いたためだ。

あなたは何者なのか？ 私がずっと必要としていた、唯一の賛辞。

そして私は黙りつづけ、沈黙に語らせるだろう。事実が私の代わりに語ってくれたのだから — 父が教えてくれたとおりに。父の遺産は言葉ではなかった。姿勢だった。

ナンド

ラスベガス

コロナの時期、2021年、私の電話は鳴りやまなかった。知っている女性も、会ったこともない女性も、次々に電話をかけてきて、助言や意見や印象や分析を求めた。彼女たちが欲しかったのは解決策ではない — そんなものを差し出したことは一度もない。自分の弱点を指摘してくれる誰かが欲しかったのだ。そして私のものの見方が私にもたらすのは、機会であって、修繕ではない。

だが、私は医者ではなかった。心理学者でもない。精神科医でもない。司祭でもない。恋人でもない。夫の器でもない。そして、

相談業を正当化できるような学位も、何ひとつ持っていなかった。

私はただの、経験を専門とする、南イタリアの抜け目ないペテン師にすぎなかった。

ナポリの友人 — いつも何かしらアイデアを持っているタイプだ — が私にこう言った。「ビジネスにしろよ。名前は**Universe for Women**。彼女たちがログインして、金を払って、おまえが答える。もうタダでやってることじゃないか」

それを作り上げるのに、時間はかからなかった。そして10万ドル以上を溶かすのにも、時間はかからなかった。あのころのナンドには金があったが、頭はあまりなかった。本能はたっぷりあった — 物語のある時点で、役に立たなくなる類の本能が。

ラスベガスの大手ポルノ会社のひとつから招待されたことさえあった。女優の何人かをコールセンターで働かせ、女性たちの電話に答えさせたいというのだ。気づけば私は、プロデューサーとCEOと**320人のポルノスター**と同じ部屋にいた。信じてほしい。楽ではなかった。まったく。男ひとりで彼女たちを抑えておけると考えた時点で、すでに間違いだった。そこに金と利害が加われれば、テーブルごとひっくり返る。

幸い、出発前に古い友人がこう言ってくれた。「現金は少しだけ持って、帰りの切符は支払いを済ませてから行け」と。さもなければ、私は永遠にあそこに居ついていただろう — あれほどの美しさに囲まれた、品のいいホームレスとして。

スタートアップが立ち上がる前に、サイトは崩壊した。理由は単純だ。仕事をするにしても、乾いた藁のそばに火の気を置けば、燃え上がる。そして、それがどれほどの被害をもたらすかは、誰にもわからない。

ナンド

その日になってようやく、私はすべての女性と一緒にすることは決してないと理解した — だが、一度にひとりという考えには、それだけの価値があった。

ホテルのポーター

春の午後、私はホテルのソファにゆったりと腰かけていた。コーヒーは飲み終え、何人かの同僚が来るのを待っていた。

そのとき、彼女が入ってくるのが見えた。

彼女は、その日の陽気のためにあつらえたような軽やかな花柄のワンピースを着て、部屋の温度を一瞬で変えてしまう類の、さりげない優雅さをまとうて歩いていた。

目が合うことは一度もなかった。

合う必要もなかった。

私のカラブリア人としての原始的な本能は、3秒ほどで分析を終えた。

美しい女性。危険な微笑み。本気で気を散らす存在。

フロントの従業員たちも、彼女に気づいた。

それどころか、彼らは突然、やる気に満ちあふれた従業員になった。

誰もが彼女の手助けをしたがった。

誰もが彼女の荷物を運びたがった。

誰もが役に立ちたがった。

彼女が、誰かスイートまで荷物を運んでももらえないかと尋ねたとき、私はプロ意識とはまったく無関係な決断を下した。

私は上着を脱いだ。

シャツをしわくちゃにした。

少しばかり薄給に見えるよう、顔つきを整えた。

そして1分もしないうちに、私はホテルのいちばん新しいポーターになった。

フロントの従業員たちを黙らせるには、ちらりと目をやるだけで十分だった。

彼らは、私がどこまでやるのか見たかったのだ。

正直に言うかと？

私も見たかった。

私たちはエレベーターで5階へ上がった。

手にはスイートの鍵があった。

ドアを開け、彼女の荷物を中へ運び入れた。

彼女はチップを渡そうと、ハンドバッグに手を入れた。

私は微笑んだ。

「きのう、あるお客さまとのあいだで起きたことで、笑ってみませんか？」

彼女は戸惑った顔をした。

それから、興味をそそられた顔に。

「ぜひ」

彼女はドアを閉めた。

ベッドに腰を下ろした。

私は立ったままでいた。

私はジョークから始めた。

それから、もうひとつ。

それから、ある話を。

時が過ぎるのにも気づかず、私たちは2時間話しこんだ。

彼女はきわめて聡明だった。

そして、とても面白い人だった。

やがて彼女は私を見て尋ねた。

「このホテルで働いて、どのくらいになるの？」

「ひと月ほどです」

彼女は微笑んだ。

「その前は何をしていたの？」

「そうですね……」

私は口を開いた。

「泥棒でした」

彼女は眉を上げた。

「でも、ただの泥棒ではありません」

「何を盗んだの？」

「女性の心です」

彼女はたちまち笑いだした。

「恋に落ちさせて、いつも本当のことを言って、ちゃんと愛して……それから姿を消したんです」

いまや彼女は、すっかり話にのめりこんでいた。

「ふりはやめて、正直に話さない？」

「もちろん」

私は彼女を見て言った。

「本当のことは単純だ。君と私は、まず婚約して、結婚はそのあと、ということになっている」

彼女は吹き出した。

「まあ」と私は続けた。「ご両親はおそらく昔気質のようだから、婚約期間は10年が妥当だろう」

この時点で、彼女は笑いすぎて泣いていた。

「でも、相性ならすぐに評価できる。少なくとも、君が私を幸せにできるかどうかは確かめておくべきだろう」

また、抑えきれない笑い。

「それに、妻と離婚して、ゆくゆくは君の資金援助で娘を嫁がせるのに十分な時間が必要だ」

彼女は私を見て尋ねた。

「ナンド……どうして私があなたを幸せにする側で、その逆じゃないの？」

私は微笑んだ。

「クラブリアが最近、性行為は最長1時間3分までとする規定を承認したからだよ」

彼女は笑いすぎて息ができなかった。

「どうして1時間3分なの？」

「1時間は女性のものだ」

私はひと呼吸おいた。

「3分は男のためだ」

その瞬間、彼女は完全に笑いに屈した。

それから私は立ち上がった。

「もう行かないと」

彼女はがっかりした顔をした。

「私はロマンチストで内気だから、自分からお願いはできないんだ」と私は言った。

「でも、君のほうから何か頼みたいことがあるなら、いつでも応じるよ」

さらに笑い声。

数日後、私は彼女を夕食に連れていった。

私たちは友人になった。

ほどなくして、私は彼女の家を訪ねた。

彼女は私を夫に紹介した。

人生というのは、妙なユーモアのセンスを持っている。

彼女がくり返し私に言ったのは、ただこれだけだった。

「3年前、あなたはどこにいたの？」

「どうしてもっと前に出会わなかったの？」

私は微笑み、私が持っている唯一の正直な答えを返した。

「なぜなら、そのころには……」

「もう泥棒をやめていたからだ」

ナンド

新しいパスポート

私はローマのフィウミチーノ空港に着いたばかりで、家へ帰る便に乗り込もうとしている。

長いあいだ家を離れていた。ニューヨークが私を待っていた。マンホールから立ちのぼる匂い、朝に通り過ぎていくゴミ収集車、クイーンズの音楽、そして、いつも決まってこう叫ぶ、あの同じ女。

「おい、この白人のクソったれ、あたしの駐車スペースから車をどけな」

それが我が家だ。それが私のアメリカだ。

パスポート審査で、係官が通常の確認のために私を呼び止める。

係官は二人いる。

二人は顔を見合わせる。目配せを交わす。それから、ついて来るよう私に言う。

そして私は考えている。

どこへ行くんだ？

私たちは小さな事務室に入った。

二人は警察の端末を開き、もう一度照会し、すべてを確かめ直し、ようやく結論にたどり着く。

一人が私を見て言う。

「フレーガさん、お伝えしなければならないことがあります。

ここイタリアでは、出国していただけます。

ですが、ニューヨークに着いたとたん、送り返される恐れが十分にあります。

パスポートの写真のあなたは、いまより20キロ重いのです。

ですから、選択肢は二つです。

今夜ファストフード店に行って20キロ太るか……

それとも、ご自分の町に戻って、新しい写真で新しいパスポートを申請なさるかです」

沈黙。

本気で、冗談を言っているのだと思った。

隠しカメラが出てくるのを待った。

誰かが飛び出してきて、イタリアのドッキリ番組でしたと告げるものと思っていた。

何も起きなかった。

これは現実だった。

私はUNITED AIRLINESのカウンターへ歩いていった。

国際線の便を保留にした。

国内線の便を予約した。

飛行機で家に戻った。

冗談の総額：

420ユーロ。

怒ってはいなかった。

いらだってもいなかった。

私はずっと微笑んでいた。アメリカへ発って45分後に家へ戻ってきた私を見たら、家族になんと言えればいいか、考えをめぐらせながら。

幸い、空の上の45分は、もっともらしい説明をひねり出すのに十分だった。

妻が空港まで迎えに来た。

心配そうな顔をしていた。

私は、心配いらないと言った。

パスポートの細かい情報をいくつか更新しなければならないだけだ、と。

それだけのことだった。

翌朝、二人の友人が手続きを早めるのを手伝ってくれた。

彼は警察の准尉だった。

彼女は警察の警部だった。

二人は緊急の書類手続きのために、私を警察本部へ連れていってくれた。

すべては順調に進んでいた：

支払い、書類、個人情報、犯罪経歴、司法証明書、パスポート用の写真。

すべて。

そのとき、デスクの向こうの警部が私を見て尋ねた。

「たった数か月で、どうやって20キロも痩せたんですか？」

答えは単純だった。

金がないとき、最初に削られるのは食べ物だ。

食べ物が消えれば、たいてい体重もあとに続く。

彼女はうなずいた。

会話はそこで終わるはずだった。

だが、いつだって「**だが**」がある。

そして私は、余計な口を挟まずにいるのが得意だったためしがない。

彼女はもう一度私を見た。

「どういう意味ですか？」

私は彼女を見て、ごく真面目に答えた。

「それがですね……

20キロ痩せました。

ですが、どうやら体脂肪が消えると、ある種の戦略的な寸法が、ずいぶん目立つようになるらしいんです。

それが生体情報の更新に当たるのかどうか、私にはよくわかりません」

沈黙。

彼女はキーボードを打つ手を止めた。

私を見た。

私は彼女を見た。

私の友人 — 警官のほう — は部屋を出ていった。制服姿で笑うことを、自分に許さなかったのだ。

警部がようやく口を開いた。

「フレーガさん……ここでお待ちください」

彼女はローマに電話した。

彼女があのかたをどう説明したのか、いまだに見当もつかない。

わかっているのは、15分後に新しいパスポートを渡され、これ以上は何もおっしゃらずにお引き取りくださいと、丁寧に頼まれたことだけだ。

その日、私は大切なことを学んだ。

政府は多くのことを追跡している。

ありがたいことに、すべてではない。

アメリカへようこそ。

ナンド

あなたは迷信を信じるか？

私の最初の反応は笑いだ — 長く、抑えきれず、必要な笑い。運命によって55冊の本に書き記すことを強いられた私のような人生は、それだけで、不可能が空想ではなく事実のなかに潜んでいることの証明なのだから。

今朝の書き出しは、誰かを微笑ませ、少し考えさせるための、ほんの手段にすぎない。

不可能の短い年代記

- **1965年** — 私は自宅で生まれる。5.8キロ。チアノーゼで、ほとんど真っ黒。誰も微笑まない。みんな、私が助かるかどうかだけを知りたがっている。
- **1970年** — 自転車事故。ブレーキレバーが目にまともに突き刺さる。血を流し、病院へ行き、30分後には何事もなかったか

のように家に戻っている。

• **1977年** — 祖父母のもとで12か月暮らす。第二次世界大戦の論理にまだ支配された村で — 戦争は32年前に終わっていたというのに。

• **1981年** — 全身麻酔での大手術。私が目覚めていることに、誰も気づかない。私は手術の一部始終を、黙って追っている。酸素ボンベは空だ。

• **2001年** — サントドミンゴで、14時間のアルコール性昏睡のあと、死亡と宣告される。私は起き上がり、朝食をとる。

• **2006年** — 七つの悪性腫瘍。余命30日。今日は2026年、私はまだ笑っている。

• **2015～2019年** — 臨床的昏睡が5回。余命わずか数時間と宣告される。3500ユーロの葬儀の請求書が届く。支払いの理由は「死亡不履行」。

• **2020年** — COVIDがやってくる。浜辺には私たち25人ほど。みんなは南米へ発つ私を見送る。私が真っ先にウイルスにさらされることを、半ば気の毒がりながら。全員がウイルスにかかる。私は遠くから、微笑みながら彼らを見ている。

• **2022年** — 私は作家になる。3年で72冊。12の言語で刊行。私はまだ出版者ではない。そしてほかの誰もが、「読者を見つける」ための金を追いかけている。

私の文学は、アルゴリズムでは買えない — 読もうとする意志によってしか、たどり着けない。

• **2025年** — ポルトガルで6か月暮らす。食費はひと月わずか70ユーロ。9人で住む家。衛生状態については、もはや言葉もない。

・2026年 — 隣人が、数キロ先の姉の家まで一緒に来てほしいと私に頼む。自分を見るたびに不運を運んでくる黒猫が怖いのだという。私たちは到着する。黒猫は遠くから私を見つめ、何も言わず、自分の金玉に触り、逃げていく。

ナンド

ナラティブの最後の結び

ある瞬間がある — それはいつも遅れてやってくる — 男が自分の人生を説明するのをやめ、ただその内側に立つ瞬間が。

生存者としてではない。証人としてでもない。あらゆる不可能な出来事の背後にある幾何学を知る、ただひとりの者として。

私は死から逃げ切ったのではない。システムを出し抜いたのではない。混沌と交渉したのではない。

私はそのすべてを歩き抜けた。私がそれを理解するずっと前から私を形づくっていた、同じアーキテクチャとともに。

それを運と呼ぶ者がいる。本能と呼ぶ者がいる。狂気と呼ぶ者がいる。

私はそれを構造と呼ぶ。

そして構造は拍手を求めない。赦しを必要としない。承認を待たない。

それは扉を閉める。静かに。完全に。鞘に戻る刃のように。

これが物語の終わりだ。だが、男の終わりではない。

ほかの者にとって不可能なことは、私にとってはただの日常なのだから。

ナンド

著者の注記

ここまでたどり着いたなら、あなたはすでに本質的なことを理解している。この本は、あなたを楽しませるためのものでは決してなかった。

あなたを位置づけるためのものだった。

どのページも、どの切り口も、どの不可能な瞬間も、感心させるために書かれたのではない — 崩れるべきときに崩れることを拒んだ人生の、その背後にある構造を明らかにするために書かれたのだ。

私は自分を弁明するためにこの本を著したのではない。痕跡を残すために書いたのだ。余白の外で生きる人々のために、何もないところから立て直す人々のために、規律とは美德ではなく — 生き残るための仕組みだと知っている人々のために。

私の物語が信じがたく聞こえるなら、それでいい。それを愛したのは私であって、あなたではない。

鋭すぎる、率直すぎる、きれいすぎると聞こえるなら、思い出してほしい。刃は、切ったことを詫びたりしない。

これは旅の終わりではない。世界が止まることを期待しても、なお前へ進みつつける人生の、ひとつの章の終わりだ。

読んでくれたことに感謝する。信じてくれたことに、ではない。読むだけで十分だった。

— ナンド

結び

「私は振り返らない。美化もしない。アーキテクチャを前へ運ぶ。構造は色あせない — 複製される。だからこそGilletteは不可

能なのだ。いま私が築くすべてのものを通して、それは呼吸しつづけているのだから」

フェルディナンド・フレーガ